
月光の宴 - 月下バトナー

月下バトン管理委員会（若干一名）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光の宴 - 月下バトン -

【Nコード】

N 6 2 6 0 0

【作者名】

月下バトン管理委員会（若干一名）

【あらすじ】

原初、宇宙は一つの爆発から生まれたという、世に言うビックバンというやつだ。

そして、ここにもまた爆発から生まれたものがある。

『月下バトン』

まあ、そんな大層なものではない。

『丘の上で月を見上げ、つぶやく』というお題に各作者が自由に書いてみると言うだけである。

お題も途中で変わるかもしれないが、またそれも仕様なので、楽し

んでもらえればと思う。

各作家さん達への感想は活動報告の方へしてもらった方がよいかと思われます。（山羊の郵便はあてにならないのです）

ゆるりとまとめていきますので、バトンがものすごく先行していらすみません。

もし月下バトンを手になされた方で、次の方へ渡す当てがないときは、どうぞ無理に繋ごうとはせずに山羊ノ宮の方へお返しく下さい。その時点で幕といたします。

尚、もしバトンが続くとしても30人で区切りたいと思います。

30人目の方は申し訳ないですが、回収しにまいりますので、そのままお持ちください。

月下バトンは無事回収されました。

一 山羊ノ宮、活動報告より「爆発ボタン↓月下ボタン」

スリーS先生から始まったこのボタンであるが、なんやかんやあって、まいまい@ノ“先生から私の所へ迷い込んできた。

丁度雨の降る夜のことである。

雨に濡れ、こちらを見つめるボタンに私はどうしようかなと逡巡する。

受け取っちまえよと、悪魔が囁く。

受けとるべきですと、天使が囁く。

めんどくさいなあと、私がぼやいたので天使と悪魔の両者から責められ、仕方なくやることにした。

・・・いや、仕方なくではなく、やる気満々で受け取ったのだった。
(裏でまた責められる私。暴力反対なのである)

例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音がしたので、俺はまためんどうなことになったなあ、とかそーういや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。――爆発、ですか？私が問うと、彼は白湯とさして変わらぬ出洩らしをすすり、――だから何だと言っのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

——というのを、自分流に書くと言つ趣旨らしい。

そして、何を勘違いしたのか山羊ノ宮は物語を書き始めるのだった。

『背後で爆発が起きて、振り返る』——山羊ノ宮の場合。

「平和主義の国」

遠くで爆発音がして、旅人は背後を振り返った。

「どうされました？クラビス」

「さつき向こうの方で・・・」

「気になるなら行ってみますか？」

「いや、いや。もうすぐ次の国だし、先を急ごう」

そう言つて、クラビスと呼ばれた旅人は深々とかぶった帽子を外し、目的の国がある方向を見た。

帽子で隠れていたのは可愛らしい顔立ち。

年頃は十代中頃だろうか。

サーモンピンクの長い髪に、スカイブルーの瞳。

黒いジャケットを着ている。

その腰を細いベルトで締め、ベルトにいくつか皮の袋を吊っていた。

「次の国がいい国だと良いのだけど」

「そうでありますね。母国を追われてはや幾年。数々の国を訪れるも今だ安寧の地はあらず。もはやこの世には何処にも我々の求める地はないのかもしれませんが」

「メルロー、言葉が過ぎないか？」

「おや、これは少々説明的過ぎましたかな」

クラビスの髪の色と同じ毛並みを持つペンギン、メルローはクラビスの腰の位置あたりを飛びながら、器用に肩をすくめて見せた。

「・・・終わつたようですな」

「・・・そうだな」

そう言つて、二人は先程爆発音のした方角を見る。
そして、また目的の国に向かって歩み始めた。

目的の国は大きく長い城壁に囲まれた国で、外からは中の様子が伺い知れなかった。

クラビス達は入国監査員の注意事項を聞き、簡単な健康診断をし、国に入る事を許された。

その国に旅人が訪れるのは珍しいらしく、クラビス達はいたるところで歓迎された。

「朝食まだならうちでパイを食べてかないか？」

「お昼は済んだかい？丁度今麺がゆであがった所だ。食べとくれ」

「おやつに特製のパフェはいかがかな？」

「じゃあ、夜はうちに来な。あんたのために牛一頭つぶしとくから丸々一匹食つてきな」

「何だ、この鳥？変な鳥」

旅をしてきて、今まで味わった事のない満腹感にクラビスは満足していた。

一方、ガキどもに羽根をむしり取られたメルローの機嫌はすこぶる悪い。

クラビスはただで貸してくれた宿のベッドに横たわる。

「いい国じゃないか。この国は」

「非常に不愉快です。さつさと出ましょう、こんな国」

メルローの不満はクラビスの寝息によつて黙殺された。

そして、その国に訪れた二日目。

クラビス達はその国の大統領邸に招待された。

「非常にいい国ですね」

「そう言つてもらえとこの国を治める私としても鼻が高いな」

大統領邸では珍しい客人を招くために食事が開かれていた。

「昨日あれほど食べたのに、よくもこれほど食べられるものですか」

「人はな、食べられるときに食べなければいけないのだ、メルロー。世の中には食べたくとも食べられない人もいるのだ。食べ物を粗末にしてはいけない。出されたものは全て平らげなければならない」
「言わんとしている事は分かりますが、クラビスのそれは食い意地が張っていると言うのです」

「この手羽先おいしいぞ、メルロー」

「それは嫌みですかな？」

「特にこのパンがおいしい。一見他の国で食べたものと変わり映えが無いが、味が全然違う」

「さすが色々な国を見て回っているだけあって、違いが分かりますな。小麦はこの国の名物です。小麦だけではなくこの国は多くの農産物が自慢です。後この国で誇れるものと言ったら鉄鋼でしょうか？丁度ここから見えますかな？あの山」

そう言つて大統領は三角にとがった高い山を指差した。

「あそこで良質の鉄鉱石が取れるのですか？」

「いえ、鉄鉱石などはもう取り尽くして、採掘跡地に鉄鋼の加工場があるのです。そこで材料を他の国から買い付けて、鉄鋼に加工して他の国へ売ります」

「なるほど」と唸るふりをして、クラビスは口にパンをもう一口押し込む。

「それと後もう一つ誇れるものがあるとすれば、平和ですかねえ」

「確かにこの国は本当に平和そうですね。のどかで、争いなんて無関係のようです」

「そうですね。争いなんて愚かなだけです。近隣にはいくつも小国があつて絶えずいざこざを起こしています。いつも我が国が仲裁に行かないと一向に戦争を止めようとしません。平和が一番だと言うのに。少しは我が国を見習つてほしいものです。平和な国。なにせ、この国では軍隊をもっていないません」

「一つお聞きしても良いですか？もし他の国がこの国に攻めてきたらどうするのですか？例えばその小国達が結託してこの国に攻め

入って来たとしたら・・・」

「もちろん話し合いで解決しますよ。話し合って分かりあえないことなどありません。時間がかかってもきつと相手はいつか分かってくれるものです」

「・・・なるほど」

「どうです、クラブリスさん。もしこの国が気に入ったのであれば、この国に腰を据えてみるのもいかがですか？」

「申し訳ありませんが、他にも見てみたい国がありますので」

「ふむむ。まだ見ぬものを追い求めて、やはり旅人とはそうでなくてはなりません」

大統領はそう言って豪快に笑い、その後もクラブリスの旅の話を馳走になり、満足したようだった。

クラブリス等もまた夜もその国の特産の料理を馳走になり、満足した。

その次の日。

クラブリス達は旅に必要な物を買そろえ、その国を出た。そして数時間後、大きな荷物を運んでいる行商人と会う。

「あんた達、あの国から来たのかい？」

「ええ。旅をしていまして、三日ほどあの国にいました」

「そうかい。あの国じゃ大変だったろう」

「いえ、そうでも・・・」

思い出しても特に当てはまる事のないクラブリスは首をひねった。

一方、当てはまるが多かったメルローはムスツとしたまま口を開かない。

「ま、聞いただけ野暮だったとか。口止めされているのだろうよ。

けど、言わんでも分かるさ。何せ、俺は武器商人だからな」

「武器を売っているのですか？」

「ああ、そうさ。あの国は近隣の国からいつも大量の武器を買いつけやがる大お得意様なのさ。一体あれだけの武器を集めて何をしようとしているのか。世界征服でもする気か？」

「でも、何処にもそんな武器は見当たりませんでしたよ」

「やつぱりとぼけるか。まあ、いいさ。俺が思うにあの山が怪しい。あの山の奥に武器を大量に隠しているのだろ？なあ、そうだろ？」

武器商人は少々興奮した様子で三角の高い山を指差した。

「確かに武器があるなら、そこに行くかもしれないね」

ああ、材料か、とクラブスは納得した。

「ほんの数日前だって、近くの小国同士がドンパチしている所にあの国のお偉いさんが丸腰で割って入っただけで、すぐに収まりやがった。何処もあの国を相手にしたくないからな。皆怖いのさ、あの国が」

クラブスは三日前のあの爆発音を思い出す。

「で、どうだったあの国は？」

「ええ、穏やかで平和な国でしたよ」

行商人は予想通りの答えが返って来て、にんまりと笑った。

以上、であります。

実はこの爆発バトン只今四つに分かれているようなのです。

爆発バトンばかりたくさんあっても仕方ないかなとも思いますので、ここでお題の変更をしたいと思います。

『背後で爆発が起きて、振り返る』↓『丘の上で月を見上げて、呟く』

に勝手に変更したいと思います。

以降、ここからのバトンを『月下バトン』とします。

さて、この無茶ぶりを・・・

例文になどなりはしないが、私も『丘の上で月を見上げて、つぶや

く』を

山羊ノ宮の場合。

その丘から見える夜空は美しい。

去年の中秋の名月は雨で見れなかったが、今年は見ることができた。
「ゴマ団子食べたいなあ」と月を見ながらつぶやく僕に姉は「花より団子ねと」突っ込む。

「いやむしろ」と僕はその辺にあったススキを手折り、茎を串に見立てて天にかざす。

「月見て団子かな？」

「食べないでよ」と冗談めかして姉が言うので、「おなか壊すつて」と僕は笑った。

二 栖坂月先生、活動報告より「月下バトンと少しだけ」

2chのまとめサイトか何かで見て、へえこりや面白いことを考える輩が居るものだと思心しましたけど、まさかそれが自分のところに回ってくるとは思っていませんでしたねー。

うん、素直に驚きました。

こんな風に活動報告を活用するってアイデアも面白いですね。

それにしても自分らしく表現とは、いざ考えてみると難しいものです。

まあとりあえず書いてみましたけどね。

まずは以下、模範解答。

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音がしたので、俺はまためんどろなことになるなあ、とかそついや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。——爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出涸らしをすすり、

——だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

しかし無謀な山羊ノ宮さん（笑）のお陰でお題が変更になっています。

新しいお題は『丘の上で月を見上げて、つぶやく』です。

そんなワケで発案者による例文など。

山羊ノ宮さん

その丘から見える夜空は美しい。

去年の中秋の名月は雨で見れなかったが、今年は見ることができた。

「ゴマ団子食べたいなあ」と月を見ながらつぶやく僕に姉は「花より団子ねと」突っ込む。

「いやむしろ」と僕はその辺にあったススキを手折り、茎を串に見立てて天にかざす。

「月見て団子かな？」

「食べないでよ」と冗談めかして姉が言うので、「おなか壊すつて」と僕は笑った。

まあ何といたしますか、とても自由な感じで良いようです。
では私の回答。

希望と名の付く丘がある。

普段は滅多に外出などしない僕が、その日は穏やかな気温も手伝ってか、散歩などという気紛れを呼び起こさせた。しかし部屋から一歩出て、家から二歩遠ざかって、上り坂で三歩歩く毎に荒い息を吐いている今は、後悔の最中にある。

とはいえ無理もない。普段ならとうに眠っている時間なのだ。運動なんて想定外の出来事だと、身体中から非難の声が聞こえてくるようだった。

それでもようやく、ガクガクと震える膝に手をのせて辛うじて立っているような僕は、目的の場所へと到達した。そこにある暖かな闇と、穏やかに微笑む満月を期待して顔を上げたその視界に、気高くも優しく照らしている白い輝きが??

なかった。

おかしい。昨日までは確かに在ったはずなのに。

そう思いつつ見回した僕は重大な事実に気付き、そして誘われるよ

うに小さな眩きを漏らす。

「あ、今昼間だし」

しまった。月下でも何でもないわ、コレ！

まあいいや。このグダグダ感もらしいと言えばらしいだろう、うん。さて問題は、これが単なる問題ではなくて、バトンだということなんです。お次はどなたに回したもののやら……とりあえずりきてつくすさんにでも回しておきますか。でもあの人忙しそうだし、人気のある人だからもう断ってそうだなあ。

まあ、もしそうならまた探すということ。

あ、そうそう、ついなので一緒に並べておきますが、逆お気に入りが少しずつ増えてきまして、さすがに申し訳ないかなーと感じましてお気に入りユーザーを一部公開することとしました。この時点で逆お気に入りに登録されていた方々と、こちらから一方的に気に入ってる方々を公開しちゃってます。

今後とも、どうぞヨロシクということ。

それでは

三　りきてつくす先生、活動報告より「バトンが来たべし（汗）」

えー、（汗）

栖坂月さんから、なんかバトンが回ってきました。

活報を活発に活用するバトンです。

以下、テンプレ。

最近「なるう」内で活動報告を利用したバトンが回っているとかで、私のところにも話が来ました。大枠はこんな感じです←

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音がしたので、俺はまためんどうなことになったなあ、とかそっぴいや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。——爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出涸らしをすすり、

——だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといったものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまいました。
新しいお題は「丘の上で月を見上げて、眩く」というものです。

えー、（汗）

そんなわけで書いてみました。りきてつくす風に……（^ー^;）
ちなみに山羊ノ宮さんと栖坂月さんの作品は、それぞれの活報でござらんになります。

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

お題『丘の上で月を見上げて、眩く』

行人坂を上りきったところで、男はふと妙な気配を感じ足を止めた。奈落に沈んだような闇に、ぼうと青白い燐光をはなつ人影が見える。幽鬼のごとくにたたずむそれは、全裸の若い女であった。

「蹴ころか？」

一瞬そう思った彼は、しかし辺りにただよう腐臭を嗅ぎわけ、そうではないことを悟った。

「面妖な、さては物の怪か」

腰を落とし、ついと太刀の鯉口を切る。刹那——女はいきなり地を蹴って、飛んだ。

にゃんぱらりん

男の顔が驚愕にゆがむ

「おお！ きゃつと空中三回転」

その瞬間、彼の剣は抜かずして敗れた。

怪異が失せた後、睨めつける下弦の月をふり仰いで、男はつぶやいた。

「……にゃんこ先生」

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

いかがだったでしょうか。あ、石を投げないで下さい（汗）

というわけで、口直しに藤咲一さんのところへバトンを回したいと思います。

受け取ってくれたらいいなあ……。

でわでわ

四 藤咲一先生、活動報告より「バトンを受け取りました。イエイ、イエイ」

って事で、いったいいつぶりなのかと言うくらい書いてなかった活動報告。

書く機会を与えてくださり、ありがとうございます。ですはい。

で、どのようなバトンが回ってきましたかと言いますと。

最近「なろう」内で活動報告を利用したバトンが回っているとかで私のところにも話が来ました。大枠はこんな感じです←

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音がしたので、俺はまためんどうなことになったなあ、とかそついや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。——爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出洩らしをすすり、

——だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといっ

たものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまいました。新しいお題は「丘の上で月を見上げて、呟く」というものです。

と言う事で、まあ、考えたわけです。

最初、『丘』『月』と聞いて、ビーズの「今宵なんとかかんとか」がエンドレスだったわけですが、ま、私なりにお題のシュチュエーションを文章にするとこんな感じ。

お題「丘の上で対を見上げて、呟く」

タイトル「明日を望む月の下で」

本文

ススキが視界の隅で揺れた。さわさわと、乾いた風を音に変える。ひとつ他から盛り上がった丘からは、小さくともはつきり、ビーコンに照らされたシャトルの天を突く姿が見えた。

我らが科学の集大成。この惑星を飛び出し、空へと登る架け橋。未だ誰もなしえない事への挑戦。その一番槍。

抜ける風。空気が冷えてきた。だが、それがいい。

雲を透かし漏れる朧な月影。今宵は中秋の名月。新円を願う。ふと、背後に気配を感じた。私は振り返らずに問う。

「関根か？」

返事はない。それに私は瞑目した。違ったのか。しかし「稲葉」と、遅れてきた声は関根のものだ。

「いよいよ。明日、発つのだな」

友からの想いが、声に乗る。心配と寂しさ。それだろうと思う。
が――

私は目を見開き、空を見る。

雲は流れ、そこに望む月が、私の赤い目へ映り込んだ。

母なる影が手招いている。なら、心は揺るがない。思いが喉から
込み上げる。

「兎として生を受けたなら、月で跳ねずして、終われないだろう」
振り返り見えた友の顔は変わらずとも、私のつぶやきを、黙って、
ひとつ頷いた。

いかがだったでしょうか？ え？ わかんない？

うう。ごめんなさい。餌は与えないでくださいまし。

まあ、私のはこんな感じですけど、他にも、このバトンを受け取り、活動報告を書かれている方もおられるようです。

例えば、私にバトンを下さった「りきてつくす」さん。

栖坂月さんや、山羊ノ宮さんも書かれておられますよ。興味のある方は、そちらの活動報告なども覗いていただければ、みなさん喜ばれるのではないのでしょうか。

っと、一段落。さあ、どうしよう。バトン。

どなたに送ろうか、藤咲一思案中……。

五 るうね先生、活動報告より「バトン」

るうねです。

どういう因果か、藤咲一さんから私などのところにバトンが回ってきました。

以下、テンプレ。

最近「なるう」内で活動報告を利用したバトンが回っているとかで私のところにも話が来ました。大枠はこんな感じです←

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音がしたので、俺はまためんどうなことになったなあ、とかそっぴいや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。——爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出涸らしをすすり、

——だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといったものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまいました。
新しいお題は「丘の上で月を見上げて、眩く」というものです。

ということらしいです。
なので、書いてみました。

お題「丘の上で月を見上げて、眩く」
タイトル「月を探して」

本文

月がなかった。

どこにいったんだ。

丘の上で、心中に男はつぶやいた。

空は晴れている。雲一つない。月が見えない場所だということもない。昨日まで、月はちゃんと空にあったのだ。むろん、月食というわけでもなかった。

それから数日がたったが、やはり月は姿を現さなかった。

男は、月を探す旅に出た。

家族も友人もなく、一人で暮らしていた男の、たった一つの心の慰めが月だった。月を見ている時だけは、孤独を忘れることができた。月は、彼にとって、友、いやそれ以上の存在だった。

しかし、どこに行っても、月は見つからなかった。月がなくなっただけのことについて、最初は人々も騒いでいたが、そのうちに慣れてしまったようだ。順応できなかったのは、男だけだった。

砂漠にも行った、高山にも登った、海中にも潜ってみた。どこにも月はなかった。

やがて、男は年老いて、旅をすることができなくなった。満足に動かない身体を引きずるようにして、最初に月がないことに気付いた丘の上に登る。男は、悄然と空を見上げた。そこに――。

「……ああ、なんだ。こんなところに」

それが、男の最後のつぶやきとなった。

どうでしょう。水曜どうでしょう。

まあ、藤咲一さんとかりきてつくすさんとかも書かれていますので、私の駄文で汚れた目をすすぎに行ってくださいまし。

そういえば、活動報告の文中にリンクを張るのって、どうすればいいんでしょうかね。やり方が分からないので、張りませんが（調べろ）。

さて、私は誰にバトンを渡せばいいのだろう。実は、私にとっては、これが一番の難問だったり（汗

六 小宮山蘭子先生、活動報告より 「∞ バトン ∞」

るうねさんからいただきました。
面白そうなので、書いてみまーす

以下、テンプレです。

最近「なろう」内で活動報告を利用したバトンが回っているとかで、私のところにも話が来ました。大枠はこんな感じです←

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音がしたので、俺はまためんどうなことになったなあ、とかそーいや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。——爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出洄らしをすすり、

——だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといったものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまいました。新しいお題は「丘の上で月を見上げて、呟く」というものです。

と、ここまで。

つまり、お題「丘の上で月を見上げて、呟く」で、なんか掌編を書くつーわけですね。

ってことで、GO！

。 . . * . . . '。 . . * * . . . '。 . . * . . .

「丘の上で月を見上げて、呟く」

薄明かりの下で、帳簿をつけていた。

満州事変以降、日本は軍事景気に沸いていた。

私の事業も上向きとなり、こうして妾の部屋にるときでさえ書類と向き合わねばならないほど、多忙な日々を過ごすことになった。

しばらくすると、上着の裾をくいくいと引つ張られた。先に寝ていたはずの多美子が目を開き、布団の中から手を伸ばしていたのだ。「どうしたんだい？」

と尋ねると、ささやくように言う。

「丘に立ってたの。夜だった」

不安げな表情だ。

「夢を見たのかい？」

「うん。月の下に真っ赤な彼岸花が咲いてた」

「それはさぞかし綺麗だったろう」

「一人で怖かった。しーちゃんをずっと待っていたのに、全然来ないんだもん」

私は「はは」と笑い、布団をめくって多美子の横に寝そべった。

「ここにいるから。もう一回、お眠り」

そう言って抱きしめるが、多美子は子供のようによいいやと首を振る。

私は眼鏡をはずすと、ゆっくりと体をずらし、多美子の胸に顔をうずめた。

そうして、柔らかな乳房をそつと掌で包み、

「ほら、丘はここにあるよ」

多美子はやつと穏やかな顔になり、口元をほころばせた。

そのまま多美子を見上げ、

「彼岸花は、多美ちゃんの唇、月は、多美ちゃんの目」

多美子はくすくすと笑い出した。私はその月をじっと見つめて言う。

「ね？ 私はちゃんと丘に来ただろう？」

「うんうん」

「だから安心して、もう寝なさい」

夜は更けていく。

多美子はやがて、寝息を立て始めた。

けれども、布団から出る気にならない。帳簿付けはまだ山ほど残っているのに。

私は、ずっとここにいられたらと、ぼんやり考えている。

丘に顔をうずめたまま、呟く。

「多美子、怖いのは、私の方だよ」と。

・：・＊：・：　　。　　・：・：・＊：・：　　。　　・：・：・＊：・：　　。

。

某ねこにゃんがリクエストしてくださったとおり、大正ロマンポルノ風にしてみました。

つか、ポルノじゃないし！　　愛やし愛。

七 かじゅぶ先生、活動報告より「バトン」

かじゅぶです。ちなみに初の活動報告です。

『なろう』で一番おつかない、あ、いやいや、素敵な作者様（もはやフォロワー不可能？）小宮山蘭子さんからバトンをいただきました。

以下、テンプレ。

最近「なろう」内で活動報告を利用したバトンが回っているとかで私のところにも話が来ました。大枠はこんな感じです←

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音がしたので、俺はまためんどうなことになったなあ、とかそついや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。——爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出洫らしをすすり、

——だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといっ

たものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によつてお題が変更されてしまいました。新しいお題は「丘の上で月を見上げて、**呟く**」というものです。

では、行ってみます。

これがかじゆぶ風かどうかは微妙な仕上がりですが（；／＼）

お題「丘の上で月を見上げて、
 呟く」
 タイトル「月下の出会い」

本文

赤い風車が回っていた。

丘陵に吹く風はどこか冷たい。しかし男は身じろぎひとつせずにとんでいた。

手に持つ風車がカラカラと乾いた音色を響かせる中、男は黙って月を見上げている。

「おじさん、なにしてるの？」

不意に背後から声をかけられ、男はとつさに身構えた。見ると子供が立っている。

「なんだ、小僧か……」

男は刀の柄にかけた手を離し、再び月を見上げた。

「月を見ていたのさ、きれいだとは思わんかね？」

「うん、きれいだね」

子供はそう答えたが月には見向きもしなかった。ただ一点、男が

持つ風車を好奇の目で見つめている。

「なんだ、これが欲しいのか？」

「くれるの？」

子供は嬉しそうに声を弾ませた。しかし男はその笑顔を見てつからかつてやるうという気になった。我ながら救いようのない性だと思わなくもない。

「くれてやってもいいが、ただではやらんぞ。それ相応の見返りがないとな」

「ケチだな、おじさん」

子供の表情が膨れっ面に変化した。こうした子供の反応はどこか愛嬌があつて可愛いものだ。

「世の中つてのはそういうもんさ」

男がニヤリと笑つてそう言つと、子供は「うーん」と唸つて腕組みをした。その仕草が妙に大人ぶっているようで滑稽でもあり、微笑ましくもある。

やがて、その子供は閃いたとばかりに膝を叩いた。

「じゃあこうしよう。将来、おじさんが危ない目にあつたときは才イラが守つてやるよ」

これには意表を突かれた。男は一瞬啞然とし、次いで豪快に笑い出した。一本とられたという心境である。

「はっはっは……、ぬかしおるわ小僧め！」

心地よい敗北感が男を満たしていた。子供は風車を受け取ると、無邪気にはしゃぎながら駆け去っていく。その背に向つて男は叫んだ。

「おい小僧、名乗つていけ！」

「弥七！」

闇の中から声がした。風車の回る音が残照の如くやけに耳に残る。

「ふん……、約束を忘れるなよ」

男は再び月を見上げ、愉快そうにそう呟いていた。

以上、お目汚し失礼しました。

このネタが分からない人もいるかもしれませんがね。
そんな若い人が羨ましい(>|<)

八 桂まゆ先生、活動報告より「ボタン」

最近流行っている活動報告ボタンを受け取りました。
私にボタンを回してくださいと危篤（苦笑）な方は、「なろう」でいちにを争うエロオヤ……（こほん）素敵な作者様のかじゅぶさんです。

他にも、様々な作者様が参加されている模様です。

以下、テンプレ。

最近「なろう」内で活動報告を利用したボタンが回っているとかで私のところにも話が来ました。大枠はこんな感じです←

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音でしたので、俺はまためんどろなことになるなあ、とかそーいや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。——爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出洩らしをすすり、

——だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといったものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまいました。新しいお題は「丘の上で月を見上げて、呟く」というものです。

では、呟いてみましょう。

お題「丘の上で月を見上げて、呟く」

手を引かれ、俺は立ち止まった。

俺の腕に手を絡ませていた女が、不意に足を止めたのだ。

「どうしたんだい？」

言われて、女は小さく首を振る。だが、その目はとても哀しげに見えた。

名前も知らない、ゆきずりの女だ。飲み屋で意気投合して、ずっと二人で飲んでいた。閉店時間になったのでタクシーを呼ぼうとしたら「迎えが来るから少し歩く」と、女が言った。

そして俺に「そこまで、送ってくれないか？」と。

確かに、下心は少しあった。少し変わっているが、とても美しい女だったので。

一夜の思い出があっても、良いかと思っていた。だが、別に無理矢理とか何とか考えていたわけではない。

女が足を止めたのは、丘の上の小さな公園だった。

そこからは、少し離れた高層ビル群が綺麗に見える。

「ごめんなさい」

女が呟く。

「何が？」

「寂しかったの。私」

俺の腕から手を放し、女が数歩前に出る。

「ひとりで、旅立つのが寂しかったの」

振り返った女の真上には、白い満月が浮かんでいる。

月明かりの下で見る女は、今まで以上に美しかった。

それなのに——数歩、引いてしまったのは多分、俺の本能が感じ取ってしまったからだろう。この女は多分、人間ではない事を。

月から、光の梯子のようなものが降りて来た。

女はゆっくりとそちらに向かう。

何度も目をこする俺の前で、女は光明に吸い込まれるように空に舞い上がって行った。

「送ってくれてありがとう。さようなら」

俺は、そんな女を見上げて——無意識に呟いた。

「さようなら。かぐや」

お題を見て、このネタを書くのは私の役目かなあと思ったわけですが（笑）

お目汚し、失礼しました。

九 名野創平先生、活動報告より「バトン」

桂まゆさんからバトンが回ってきました。
以下、テンプレ。

最近「なろう」内で活動報告を利用したバトンが回っているとかで、私のところにも話が来ました。大枠はこんな感じです←

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音でしたので、俺はまためんどうなことになったなあ、とかそういや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。——爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出涸らしをすすり、

——だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといったものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまいました。新しいお題は「丘の上で月を見上げて、呟く」というものです。

お題「丘の上で月を見上げて、呟く」
タイトル「吸血鬼と狼男の楽しい紳士協定」

本文

「お互いマイノリティー同士、仲良くしようじゃないか」

と、紳士協定を持ち掛けてきたのは狼男だった。現代社会に生きにくさを感じていた私は、一も二もなく彼の申し出を受け入れた。

吸血鬼と狼男、異なる種族が平和的に共存するためにいくつかの取り決めに交わした。

その中の一つに『獲物のトレード』なるものがあつた。

私達は、これまで曖昧だった互いの狩り場の境界線を明確にし、不可侵協定を結ぶことにした。しかし狩り場が限定されると獲物の質が偏る恐れがある。そこで、自分の狩り場に相手好みの獲物がいたら交換しよう、ということになった。

幸いなことに私と彼とでは嗜好が異なっていた。私は女の胸部に、彼は女の臀部に異常なまでの執着を持っていたのだ。

「やあやあ、待たせたね！ 今日の獲物はかなりの上玉だよ」

狼男が小脇に女を抱え、丘を駆け上がってきた。狩り場の境界線上に位置するこの丘で、私達は週に一度、獲物の交換を行う。

「ご覧よ、このおっぱい。今宵のお月様のようにまんまるだ」

気絶している女を地面に転がし、狼男は得意げに言った。確かに女の胸は立派だった。しかしそれは明らかに紛い物だった。

お前の目は節穴か！ 野生児のくせに豊胸や詰め物の一つや二つ

見抜けなくてどうする。いくら尻フェチで尻にしか興味がないとはいっても、人様に差し出すものくらいきちんと吟味したらどうなんだ。私はお前好みの尻を用意しているというのに。——と、言いたいが言えない。言えば協定が無になってしまう。

不満を募らせる私をよそに、

「うーん、これはなかなか……」

狼男は、私の持ってきた獲物の臀部を撫で回して唸った。

「この絶妙な垂れ具合といい、脂肪と筋肉の割合といい、君は尻を見る目があるよ。うん。尻フェチの僕が太鼓判を押すんだ、自信を持っていよ」

そんな自信持ちたくもない。

「そうか、気に入ってもらえてよかった」

私は心にもないことを言った。本当に、現代社会は生きにくい。

「うん、お互いにね。じゃあ、また来週！」

そう言って狼男は、獲物を肩に担ぎ、慌ただしく丘を駆け下りていった。

狼男が去った後もしばらくの間、私は丘の上で月を眺めていた。すぐに帰る気にはなれなかったのだ。

狼男が満月にたとえた女の胸を指でつつく。ぽすん、と悲しい音がした。

「なにがまんまるおっぱいだ。上げ底じゃないか……」

ふたたび天を仰ぎ、私はぽつりと呟いた。いびつに凹んだ女の偽乳同様、夜空に浮かぶ月もゆがんで見えた。

三行で終わらせるはずが、予想外に長くなりました。以上。

十 床先生、活動報告より「月下バトンもらいました」

名野さんから月下バトン頂きました。

テンプレ

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音がしたので、俺はまためんどうなことになるなあ、とかそーいや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。——爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出涸らしをすすり、

——だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといったものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまいました。新しいお題は「丘の上で月を見上げて、呟く」というものです。

お題「丘の上で月を見上げて、呟く」

今宵月の見える以下略

彼は歩いていた。

林の中を走る鉄路を辿り、ふうふう言いながら、歩いていた。目的地はない。

ただただ、ぼんやりと、歩いていた。

うつそうとした林の中から、ほっほう、と声が聞こえる。

ものがない、どこもなく不気味なふくろつ声にも、彼は顔を上げない。

注意ぶかく足下を見つめたまま、よたよたと歩き続ける。

どれくらい進んだか。

彼は不意に首をもたげ、ひょいと林の向こうを見た。

そこには赤ん坊の尻のような、ふつくらとした丘がある。

彼はそれを見ながら少しよたよたして、立ち止まり、少し考えた後、そちらへ足を向けた。

鉄路を越え、林へ入り、彼は丘へと歩いてゆく。

むつちりとした腕にまつわりつくやぶ蚊をぱちんと叩き、いかぐり頭を掻き掻き、彼は丘を上ってゆく。

頼りない足取りで、下を向いたまま、いっしょけんめい上ってゆく。

やっとの事でたどりついた丘の上には、まんまるの月が浮かんでいた。

彼はそれを見上げて少しぼんやりして、しょっていたリュックを下ろす。

彼が大きなお尻をつくつと、草がつぶれて青いにおいをさせた。

小脇に抱えていたスケッチブックを開き、彼はもう一度、月を見上げた。

真つ黒な空にかかった真つ白な月は、ぽっかり空いた穴みたく見えた。

ぽうつとそれを眺め、彼は呟く。

「お、おむすびが、食べたいんだな」

さくつと書いてしまいましたが、いいのかなこれで。

十一 飯野こゆみ先生、活動報告より「月下バトンもらいました^^」

初めて書く活動報告にちよつと緊張です。

初めっから書いていなかったので、中々書けなかった活動報告。

良い切っ掛けを貰ったのかもと『床たん』からバトンを受け取りました^^

以下テンプレです。

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音がしたので、俺はまためんどうなことになったなあ、とかそついや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。——爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出涸らしをすすり、

——だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといったものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまいました。
新しいお題は「丘の上で月を見上げて、呟く」というものです。

三行で書いてみると

小高い丘の頂上に立ち、月を見上げると思い浮かんだ貴方の顔。そ
してそつと呟くの「まだ忘れてないよ」と。それはあなたを忘れた
くないと願う私の儀式。あの時触れた唇が忘れられない。夜風にそ
の感触を奪われないようにそつと唇を手で覆った。

こんな感じかなあ。

と言う事でイメージ膨らんだので、短編書いてみました。
さらつと勢いで書いたので、見なかった事にして貰った方が正解か
も。

——《初恋》——

付き合い始めて一か月。

友達は、好奇心いっぱい私に聞いてくる。

「やっぱりキス上手なの？」って。

その質問をされる度に私は、にっこり笑ってやりすごすんだ。
勿体ぶってないで教えてよ、なんて肘鉄を食らわされるけれど答え
なんて解らないよ。

だって、私したことないんだもん。

キス魔と言われ、キスをした子はみんなその唇に夢中になるって専
らの噂。

あの子もあの子もあいつとキスした事があるって言うのに、彼女の
私がした事無いつてどうということなのよ。

そんなある日、塾の帰り道にガードレールに凭れるあいつを見つけ
た。

「お疲れ、ちよつといいか？」

いつもは馬鹿みたいにノー天気なあいつの神妙な口ぶりに、心臓が
キュット縮まった。

「うん、ちよつとなら」

少しだけ手の甲が触れ合う距離で、私とあいつは月夜が照らす一本
道を静かに歩く。

その間二人には全く会話が無く、時折穏やかに吹く風に揺れる木の
葉のさえずりと私達の足音だけが響いていた。

足が止まったのは緑地公園の小高い丘の上だった。

「俺な——」

一旦そこで言葉を区切ったあいつは、大きく深呼吸して

「これから引越す事になった。夜逃げだって」

と言い放った。

夜逃げ、引越し。その言葉がぐるぐると渦巻きのように頭の中を

巡っている。

理解しても理解したくない。

呼吸が出来ないくらい胸が苦しくなった。

「月子」

名前を呼ばれて、顔をあげるとふんわりと私の顔に影が出来た。

「岡野……」

唇に優しい感触を残したまま、あいつの名前を紡いでいた。

泣くなって。

そう言って、私が気が付いていなかった頬に流れ落ちた一滴を親指で拭われた。

「岡野、月明かりの丘の上で、月子にキスをする。なーんてな」
お茶をけるけど、笑えない。

「何で？」

右手で唇に触れながら、岡野を見上げた。

「何でってキスした事？」

真顔で私を見つめる岡野の瞳にくしゃりと歪んだ私の顔が大きく立てに揺れた。

「忘れないで欲しかったから。月を見上げたら俺を思いだして欲しかったから」

言い終えたそばから数えきれないくらいキスをして、岡野は私を家まで送ってくれた。

次の約束も無かったけど

「またな」

とまるで明日にでも会いそうなそんなノリで手を振って私の前から消えてしまった。

玄関を閉めると一気に階段を駆け上がった。

部屋に入りドアを閉めると、そのまま足元が崩れていく。

カーペットのざらつきを両手で掻き毟ると、ひざの上にくつもの涙が零れ落ちる。

カーテンの隙間から眩しいくらいの月明かりが差しこんでいた。

結局そこから動けずに膝を抱えて朝を迎えた。

翌日、学校では岡野の話題で持ち切りだった。

当然、私にも質問の嵐だ。

だけど、いつもの質問は誰もしてくれない。

今日だったら答えられるのに。

あれからいくつかの季節を跨いだけれど、岡野からは連絡のないまままだ。

あの日のように風の穏やかな月夜の晩。

そっと部屋を抜け出してあの丘まで一人やってきた。

丘の上、月を見上げ

「忘れられるはずないじゃない」

人差し指で唇をなぞって、そっと呟いた。

十二 近藤義一先生、活動報告より「バトンとは何か。」

ども、近藤です。何かって、関東北部に伝わる、先の尖った筒で任意の相手突き刺し、出血量の多寡で勝敗を競うという、古式ゆかしい雅やかな格闘技のことですよ。

飯野こゆみさんから戴きました。どうしたもんかな。

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音だったので、俺はまためんどろな事になったなあ、とかそーいや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。――爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出涸らしをすすり、

――だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといったものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまいました。新しいお題は「丘の上で月を見上げて、呟く」というものです。

あらかじめ補足。適宜漢字に変換しながら読んでみてください。

ギ・ギー・カッシャ・カッシャン。カッカッカツ。ギギギ。

コウバイハ、ニジュウニド。

ガ・ガ・ガ・ガイン・ガイン・ギー・ギー・カツ・カッシャン。

ジョウクウニ、ツキ、カクニン。カクニン。スピーカー、オン。

グイングイングイングイン・パッシュウウン。

<<「あくまつかい」よろしく>>

ピッピッピッ。ドカーン。

宣伝しちゃったよ。怒られるのかなあ。近藤は友人少なく、回す相手の見当もつかないので、バトンは頭に刺さったままにしておきます。どなたか気が向いた方、よろしくお願いします。

十三 沢木香穂里先生、活動報告より「ボタンが来ました。」

最近、なろう内で回っているボタン。

近藤さんからいただきましたよ。

あれれ。ボタンは、近藤さんの頭に刺さっていたはずなのにね！
どうしたことでしょう。

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音だったので、俺はまためんどろな事になったなあ、とかそついや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。――爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出洫らしをすすり、

――だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといったものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまいました。
新しいお題は「丘の上で月を見上げて、呟く」というものです。

『月夜の決闘』

やあ、ボク。りつきー。名野さん家に来てもうすぐ一年になろうとしている妖精さ。

ボクは、一通の手紙を広げ、うーんと唸っていた。それは、なんと白い紙に筆で書かれた果たし状だったんだ。

——貴殿との決闘を申し込む。本日、午後七時に月下の丘で待つている——

送り主は、妖精界で同期のトシだ。トシとは、同じ時期にこの人間界にやって来た。真面目なトシは、せっせと研鑽を積んでいたようだ。ボクだってそれなりに魔法の練習はしてきたさ……。ただどなあ、優等生のトシの魔法に太刀打ちできるんだろうか。悩ましい思いをボクは、日本酒と一緒にぐびりと飲み干したよ。そしてふうと息を吐いたんだ。

「おい。酒臭いぞ。りつきー」

隣でブルーノが言った。

「ああ、ごめん。ごめん」

「オラが代わりに出てやるうか」

ブルーノは、茶目っ気たっぷりにブレスレットをかざして見せたよ。

「よせやい。トシは、ボクに決闘を申し込んできているんだ。それにブルーノのほうが、魔法歴が長いだろう」

「まあね。しかしおおげさだなあ……。要は、魔法の力くらべだろう？」

ボクは、うんうんとうなずきながら、杖を布で磨いた。

「お互い切磋琢磨しようって、人間界に来る時に約束したんだ」

ボクは、きつと前を見据えて言ったさ。

「問題は、トシもボクと一緒に、魔法のアイテムが杖だって事さ」

ブルーノは、魔法のブレスレットを使って調理器具をふるい、トコは、魔法の靴でリズムを刻む。そんな中で、魔法の杖は一番汎用性がきくんだ。

トシの魔法の上達ぶりは、どんなものだろう。ボクは、かないっこないように思えて気乗りしないままに丘に向かったよ……。

「りつきー。待っていたよ……」

トシは、長く尾を引く影を連れて待っていた。

「トシ。一年ぶりだなあ」

「ああ。久しぶりだ。りつきー」

ボクたちは、まずは互いを懐かしんだ。

「じゃあ、お互い魔法がどのくらい上達したか、披露しあおうじゃないか。いざ、勝負」

「よし。勝負だ」

トシは、ゆっくりとした呼吸の後、くるりとバトンのように杖を回した。次の瞬間、なんと丘の上にはあっとお花畑が現れたじゃないか。そこには、今の季節には咲かないはずの月下美人が揺れているんだ。なんと幻想的な風景だったよ。

「うーん。美しい」

話し声にボクは振り返った。なんと、ブルーノがついてきているじゃないか。

いつの間にかトコやルネも加わっている。三人でボクらの様子を見守っているんだ。

ボクだって、負けてはいられないって思ったよ。ようし、そう来るなら自慢の魔法で応戦してやろう。ボクは、空に向けて杖を振った。

「群青オーロラ！」

たちまち夜空にあるう筈もないオーロラが出現した。七色にキラキラと光っている。一発でこの魔法が決まるまでどれだけ練習した事だろう。そして、この魔法はトコに披露した事はあるけれど、あの二人は知らないはずさ。

「きれい……」

ルネがため息をついた。

「うーん。これはまた凄い……」

ブルーノも唸っている。

「わたしは、やはり月下美人の方がいい」

トコがさらりと言ったのけたよ。

「何故なら、この丘とのコントラストが優れているからだ」

「なるほど魔法には、TPOも必要なものね。技術的には、オーロラの方が素晴らしいけど……」

ルネも同調している。三人のうちの二人までが、トシの魔法を支持している。

やがて、ボクのオーロラは、空からすうっと消えていった。けれど、お花畑はそのままだ。

「この花畑は、明日の朝までこのままだよ」

トシが言った。

「そりゃあすごいや……」

ブルーノが腕組みして感心している。判定は、どう見てもトシの勝ちだ。

「負けたよ。トシ……」

「そんなこたあない。オーロラも凄かったぜ……りっきー。また来年、会おう」

ボクは、うなずくとトシに背を向けた。そしてゆっくりと丘を降りた。

降りぎわにぼそりボクはつぶやいてみたよ。

「今度は、酒飲み勝負だ」

「だが断る」

すぐに返ってきたぴしりとした物言いに、ボクは、まだまだ修業が必要なんだなって思ったんだよ。

私らしさは、わる子ちゃんか群青まーぶるのいずれかしかなかった
ん。

とりあえず、中締めって事で、バトンはトップバッターのところに
持って行ってみます。

途中でお題も変わってるし。

十四 スリース先生、活動報告より「突然変異バトン」

さて、自分が出したバトンが姿かたちを変えて舞い戻ってきました。

なんだから、「丘の上で月を見上げて、呟く」らしいです。
以下がおさらい。

ここから始まった。

小説家ごとの「背後で爆発が起きて振り返る」

？まいまい@ノ”さんが纏めている爆発バトンの歴史。
適当に作った、「爆発」バトンリスト

月下バトン管理委員会会長の山羊ノ宮さんの月下バトンの歴史。

月光の宴 - 月下バトン -

それで、私の場合はと言うと。

『環状列石の一部に刻まれてあった、現在では失われた言語について解読作業が進められ、遂にその意味するところを知ることが出来た。石の並びは「夜に吠ゆるもの」の召喚に使用される祭壇の役割を果たしていたのだ。「月に吠ゆるもの」は邪悪な神性の顕現である。この世界に招来させんとする破滅主義者の野望を止めるために、ダイナマイトで爆破しておかねばならん』

「遅かったんですよ、先生……」

若者は勇敢な老探索者が遺した手記を握りしめ、丘の頭頂部にあ
る影を見ていた。

手遅れだったのだ。

『夜に吠ゆるもの』は召喚された。

環状列石の中心で天上に輝く月に向かい、ナイアルラトホテップは冒瀆的な声で鼓膜が張り裂けんばかりに嘶いていた。

趣味に走った結果がこれだよ。即興の割に雰囲気は上々。

さて、誰に回そうか。

では阪野隆平さんにバトンを渡します。

悩んでいるようでしたので、これでもやって気を抜きましょ。

十五 阪野隆平先生、活動報告より「雑記という名の時間稼ぎ76」

【月下バトン受け取りました】

「丘の上で月を見上げて、呟く」というお題のバトンがスリース先生から回ってきました。知らない方の為にテンプレを…

最近「なるう」内で活動報告を利用したバトンが回っているとかで、私のところにも話が来ました。大枠はこんな感じです←

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音でしたので、俺はまためんどろなことになるなあ、とかそいういや昼飯も食っていないなあとか色々な思いを巡らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。——爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出涸らしをすすり、

——だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

まあこんな感じで、その人の個性を出した短文をこしらえるといったものです。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまいました。

新しいお題は「丘の上で月を見上げて、呟く」というものです。

とのこと。

そういうわけで、面白いかどうかは保証しかねますが（笑）早速、阪野流「丘の上で月を見上げて、呟く」を…

お題「丘の上で月を見上げて、呟く」

タイトル「『月』を呑む」

本文

家近くの広い公園。その小高い丘の上には樹齢何百年にもなるという巨木が植えられている。

なんでも、どこかの城が明治維新の際に廃城になった際、あまりにも見事なこの樹を切り倒すのは惜しいとかでこの場所に植え直されたらしい。詳しい由来は知らないが、昔の人もなかなか粹なことをしたものだ。

今、私はその巨樹の下に腰を下ろしている。

秋の夜風に吹かれた枯葉たちがカサカサと揺れる音は聴き心地が良い。他の場所よりも小高い位置にいたため身体に当たる風もやや肌寒く、少し厚着をしなければ風邪を引いてしまいそうだ。だが、ここから一望できる景色を見れば、そんな欠点などはささやかなものでしかない。

下に目を向ければ、天の川のごとく燦然と輝く街の灯り。

一方、目を上に向ければ、小さな星々に囲まれる中、一際強く大きく輝く丸い月が目を引く。

今夜は満月。

私は持ってきた水筒の中身をコップの中に注ぎ込む。中に入っている液体は何の変哲もない、ただの水だ。

給料日前の私に高い日本酒を買う金などはない。かといって、この見事な満月の日には何かを吞まずにはおれない。

考えた結果、折衷案として吞むものは水になる。毎度のことだ。

コップに充分な量の水を注ぎ終わると、私はその水面に月を映し、そして味わいながら口に含んでいく。

ここに来る前に家で沸騰させた水なので、若干ぬるい。だが、その僅かな暖かみが月の味のような気がする。優しい味だ。

それは錯覚かもしれないが、気持ちの良い錯覚だ。

一杯を呑み終えたコップに再び水を注ぐ。

そして再びその水面に月の姿を映し、水を口に含む。

身体が酔うことはないが、心は酔いそうだ。

下には光の海。

上には輝く満月。

この風景を見ながら、吞む。
最高だ。

それを何度か繰り返す。やがて水筒は空になる。

私は立ち上がると、下方に広がる街の灯りに目を向ける。その後で月を見上げる。

その月に深く一礼して、私は呟く。

「今日も最高だったよ」

心の中で続きを付け加える。

（次も頼むよ）

私は街の灯りと月の輝きを背に、それらを振り返らず丘を去った。

いかがだったでしょうか。即興にもほどがあるのでつつこみどころありだとは思いますが（汗）少しでも読んで楽しめたなら、幸いです。

ではバトンなので、次の方を。

……ここは自分の中でも『大人』で『漢』で『人生の師』の他楽先生に（笑）

色々と大変でしょうが、先生verの「丘の上で月を見上げて、
呟く」を読んでみたいので。

今日はこの辺で。

それでは（シュタッ）

十六 他楽先生、活動報告より「急にバトンが来たので……」

【瑞穂】 9・9%

皆さんコンバンワ。

一週間ぶりの他楽です。

久し振りの放置でしたね、ゴメンナサイ。

色々あって、PCに触る事すら出来ませんでした。

が、それについては、明日の活報にて。

今日は【バトン】です。

前回の活報をあげた後に、阪野隆平先生から「丘の上で月を見上げて、呟く」というお題のバトンを頂きました。

まずは、知らない方の為に概要を。

お題「背後で爆発が起きて、振り返る」

・例文

ケータイ小説

「ドカーン！俺はびっくりして振り返った。」

ラノベ

「背後から強烈な爆発音がしたので、俺はまためんどうなことになったなあ、とかそついや昼飯も食ってないなあとか色々な思いを巡

らせつつも振り返ることにしたのである」

京極夏彦

「凄まじい音とともに地面が揺れる。――爆発、ですか？私が問うと、

彼は白湯とさして変わらぬ出洫らしをすすり、

――だから何だと言うのか。と答えた。りん、と、何処かで風鈴の音がした。」

大体こんな感じで『お題』に合わせてその人らしさがでるように書くんだそうです（うん、オイラにもよく分かん）。

しかし山羊ノ宮さんの陰謀によってお題が変更されてしまったそうなのw

新しいお題は「丘の上で月を見上げて、呟く」というものです。

最近、なろう各所で流行っているのは知っていたのですが、まさかオイラの所にこようとは^^；

完全に予想外ですw

なので、巧く出来るかどうか不安ですが、やってみようと思います。

お題【丘の上で月を見上げて、呟く】

タイトル【望月】

薄闇の中に、一人の青年が佇んでいた。

頭上には満点の星々と、漸く眠りから覚めた細い月。その淡い光源に、挑むような視線を向けながら呟く。

「あれは俺だな」

かつて、まだ少年と呼べる年の頃、彼は村を飛び出した。

あの小さな世界で、一生を土にまみれて老けていく事に耐えられなかった。

ここではない何処かなら。

今とは違う自分なら。

きつと、何か『特別な事』が出来る。

そんな少年特有の心から見れば、慣れ親しんだ生家も牢獄と変わらない。

だから、ある日、誰にも告げずに家を出たのだ。

それから数年。

彼は傭兵になっていた。

未だたいした戦果も挙げられず、各地の戦場を転々としては日々の糧を得る生活だったが、その胸に宿る灯火は、いささかも衰える事無く燃えていた。

——いつか、世界に名を刻んでやると。

月は、人の一生に喩えられるかもしれない。

月日と共に光を増し、やがて、誰もの目に留まる大光となる。

しかし、それもまた月日と共に衰え、静かに消えてゆく。

太陽のように、永劫の輝きを放つ事はない。

しかし、彼はそれでよかった。

永遠を生きられぬ人の身ならば、せめて一瞬でも輝いてやる。
星のようになりふれた輝きではなく、万人の脳裏に焼きついて離れない輝きに。

「見ているよ。俺もいつか、他の星が隠れるくらいに輝いて見せるぞ」

その声を聞いたのは、やはり、満天の星だけだった。

……こんなんでいいんでしょうか^^；
自分でもよく分からんものになっちゃいましたがw

ええと、あと何するんでしたっけ？

次の人を指名？

つても、オイラ知り合い少ないしなあw

今まで誰がやったのかも知らないしwww↑

持って行きたい方、持ってつてくれ。

オイラんとこで止まっても構わないので、どうぞ。

では、また明日（ω₁）ノシ

編集後記

まず私が口にする言葉は何をおいても感謝でありましょう。

この月下バトンにお付き合いただいたき読んで下さった方々、また参加して下さいました各作家様方。

ありがとうございます。

そして、慣れぬとはいえ、私の不手際で不快な思いをされた方、また私の言動に気を悪くされた方などいらっしやいましたら、謝罪を。すみませんでした。

今このサイトに様々なバトンが飛び交っています。

もしかしたらバトンと聞くだけで嫌な顔をされる方もいるかもしれませんが。

かくいう私もバトンと聞くと不幸の手紙のように思ってしまうのですが。

それでもここまで読んで下さった方々ならお分かりになると思います。

バトンにも良い面がある。

その良さを活せないだろうかとの月下バトンをまとめながら思っております。

ですが、私にできたのはただバトンの行く末を見守るだけ。

自分の力のなさを呪うばかりです。

手助けするはずの私が、逆に陰ながら手を差し伸べていただく始末。その節は満足にお礼も言えず、申し訳なく思います。

うーむ、どうにも暗い方向へいつてしまう。

すみません。

では、改めてお礼を。
ありがとうございました。

これにて月光の宴、幕といたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6260o/>

月光の宴 - 月下バトナー

2010年11月27日20時50分発行